

平成30年度 病害虫発生予報 第7号

平成30年10月19日
栃木県農業環境指導センター

○施設栽培は予防・初期防除が重要です！保温開始前に防除を徹底しましょう！

予想期間 10月下旬～11月下旬

予報の根拠で、(+)は増加要因、(-)は減少要因を表す。

1 いちご うどんこ病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根拠 ・現在の発生量は少ない(平年比13.8%：ほ場率、平年比3.7%：発生株率)。
(-)
・向こう1か月の降水量は少ない～平年並、日照時間は平年並～多い見込み。
(-)
- (3) 対策 ・特に日照不足等で、株の軟弱徒長や樹勢低下が見られるほ場では発生しやすくなるので、適正な温度管理やかん水を行うなど、ほ場の管理に留意する。
・現在発生が見られなくても、今後発生する可能性があるため、ベルコートフロアブル等を散布する。
・ほ場を良く観察し、初発を見逃さない。発生が見られたら、シグナムWDG等を散布する。

2 いちご アザミウマ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根拠 ・現在の発生量は平年並(平年比75.9%：ほ場率、平年比46.2%：発生花率)。(±)
・向こう1か月の平均気温は平年並～高い(±～+)、降水量は少ない～平年並(±～+)。
- (3) 対策 ・雑草はアザミウマ類の増殖源になるので、施設内の除草を行う。
・低密度のうちにマツチ乳剤[ミカキイアザミマ]等のIGR剤を散布する。
・花を観察して、1割以上でアザミウマ類が見られた時は、被害が大きくなる恐れがあるため、ディアナSC等を散布する。
- (4) 備考 ・10月中旬までに開花が進んでいるほ場では、秋期のアザミウマ類の発生が多い傾向にあるので、注意する。
・[防除のポイントNo.19](#)、[薬剤感受性検定結果](#)を当センターホームページ(HP)に掲載中。

3 いちご ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや少ない
- (2) 根拠 ・現在の発生量は少ない(平年比11.1%：ほ場率、平年比3.8%：発生株率)。(一)
- (3) 対策 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高いの見込み。(±～+)
・ほ場をこまめに観察し、増殖する前に防除を行う。
・化学農薬に対する感受性低下が著しいため、必ずローテーション散布を行うとともに、抵抗性が発達しない気門封鎖剤や天敵製剤を活用する。
・カブリダニ類(天敵)導入時はハダニ類が多いと失敗しやすいので、気門封鎖剤などを定期的に散布し、ハダニ類の増殖を抑制しておく。
・気門封鎖剤は卵に効果が低いため、5日程度の間隔をおき、複数回散布する。
・葉の傷みを防ぐため、高温時や乾きにくい雨天日の散布を避ける。
・葉かき後は薬剤がかかりやすいので、葉かき作業にあわせて薬剤を散布する。
- (4) 備考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

4 イチゴ ハスモンヨトウ

- (1) 発生予想 発生量：平年並
- (2) 根拠 ・現在の発生量はやや少ない(平年比7.9%：ほ場率、平年比0.3%：発生株率)。
(-)
・10月第1半旬までのフェロモントラップによる誘殺数はやや多い。(+)
- (3) 対策 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高い見込み。(±～+)
・定期的にはほ場を観察して早期発見に努め、卵塊や分散前の幼虫を寄生葉とともに摘み取り処分する。
・ハスモンヨトウの幼虫は、齢期が進むと被害が大きくなる上に、薬剤が効きにくくなるので、発生初期の若齢幼虫のうちに薬剤防除を行う。

5 トマト 葉かび病

- (1) 発生予想 発生量：少ない
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は少ない（平年比0%：ほ場率、平年比0%：発生株率）。（－）
 ・向こう1か月の日照時間は平年並～多い（－～±）、降水量は平年並～少ない（－～±）。
- (3) 対 策 ・施設内が多湿にならないように換気やかん水に注意する。
 ・肥料切れ等により生育が衰えると発生しやすいので、肥培管理に注意する。
 ・発病葉は伝染源となるため、発生初期に速やかに取り除き、施設外で処分する。
 ・予防を主体にベルコートフロアブルやアフエットフロアブル等を散布する。
 ・発生が見られたらトリフミン乳剤やファンタジスタ顆粒水和剤等を散布する。
- (4) 備 考 ・抵抗性品種に発病するレースが確認されているため、抵抗性品種を栽培しているほ場でも、発生に注意する。

6 きく ハダニ類

- (1) 発生予想 発生量：やや多い
- (2) 根 拠 ・現在の発生量は平年並（平年比122%：ほ場率、平年比131%：発生株率）。（±）
 ・向こう1か月の平均気温は平年並～高いの見込み。（±～＋）
- (3) 対 策 ・薬剤がかかりやすい生育初期からの防除を行う。
 ・葉裏をよく観察し、発生が認められたら下葉や葉裏にもよくかかるように丁寧に気門封鎖剤やダブルフェースフロアブル等を散布する。
- (4) 備 考 ・[薬剤感受性検定結果](#)を当センターHPに掲載中。

7 その他の病害虫

		現 況	発生予想			現 況	発生予想
いちご	アブラムシ類	やや少	平年並	きゅうり	うどんこ病	平年並	やや少
	炭疽病	平年並	平年並		べと病	平年並	やや少
トマト	灰色かび病	少	少	にら	白斑葉枯病	やや少	少
	黄化葉巻病	平年並	平年並	きく	アザミウマ類	少	やや少

秋の病害虫防除対策

○水稲の縞葉枯病、黄萎病

・両病害が発生したほ場の再生稲（ひこばえ）は媒介虫の増殖源及び、ウイルスやファイトプラズマの伝染源となります。早期の丁寧な耕起により次年産の本病拡大を防ぎましょう。

○麦類種子伝染性病害

・近年、オオムギ斑葉病等の種子伝染性病害が増加しています。種子消毒を適切に行いましょう。
[植物防疫ニュースNo. 8](#)を当センターHPに掲載中。

○トマト黄化葉巻病（TYLCV）

・TYLCVはタバココナジラミによって媒介されます。媒介虫や感染源となる罹病植物を施設内に「入れない」対策の徹底が重要です。また、定植後は、黄色粘着板を設置して媒介虫の捕殺と発生状況を把握し、発生初期の防除に努めましょう。罹病株は見つけ次第抜き取り、抜き取った株は放置せず、速やかにビニール袋などで密閉し、枯死させてから処分しましょう。

○ナシ黒星病（秋季防除）

・病原菌は芽や落葉で越冬し、翌年の発生源となるため、収穫終了後は徒長枝の先端までまんべんなく薬液がかかるよう丁寧に薬剤散布を行い、園内外の落葉を集めて適切に処分しましょう。防除の際は周辺へ飛散（ドリフト）しないよう十分注意しましょう。

☆農薬は適正に管理し、正しく使いましょう！

☆同一薬剤の連用を避け、異なる系統の薬剤をローテーション散布しましょう。

1か月気象予報（予報期間10月19日から11月20日 10月18日気象庁発表）

天気は数日の周期で変わりますが、平年に比べ晴れの日が多いでしょう。向こう1か月の平均気温は、平年並または高い確率ともに40%です。降水量は、平年並または少ない確率ともに40%です。日照時間は、平年並または多い確率ともに40%です。週別の気温は、1週目は、高い確率60%です。2週目は、平年並または高い確率ともに40%です。

	低い（少ない）確率	平年並の確率	高い（多い）確率
○気温	20%	40%	40%
○降水量	40%	40%	20%
○日照時間	20%	40%	40%

詳しくは農業環境指導センター（TEL 028-626-3086）までお問合せください。
 病害虫情報発表のお知らせはツイッター「栃木県農政部(@tochigi_nousei)」、農業環境指導センターホームページ（<http://www.jpnp.ne.jp/tochigi/index.html>）でもご覧になれます。